

ワクチン接種、推奨せず

子宮頸がん 厚労省、副作用調査へ

子宮頸がんワクチンの接種後に長期的な痛みやしびれを訴える人が相次いでいるため、厚生労働省は14日、一時的に接種の推奨を控える方針を決めた。接種は中止しないものの、自治体に対し、対象者に個別の案内を出さないよう警告した。法により自治体の実施している定期接種のワクチンで推奨を控えるのは異例

のことだ。

▼37面II安全性評価できず

この日、開かれた厚労省検討会が「痛み、しびれの原因を調査し、きちんと情報提供できるようにするまで、推奨を控えるべきだ」と結論づけた。対象者は希望すれば、無料で受けられるが、医療機関での接種前にも、推奨されていないことが説明される。接種者が

大幅に減る可能性がある。

子宮頸がんワクチンは2010年に国の助成が始まり、予防接種法改正で今年4月に定期接種になったばかり。小学6年〜高校1年の女子が対象。安全性をめぐり懸念の声が出ている。これまで推計328万人に接種され、1968件の副作用が報告されている。検討会では、接種後に体

に痛みが出るなどの43例の原因などを話し合った。しかし、因果関係がはっきりしないことから、委員からは「さらに調査が必要」との声が相次いだ。同省は、予防接種と痛みの関係について数カ月で、情報収集、分析を進め、積極的に推奨すべきか結論を出す方針だ。

検討会は、接種そのものの中止は「必要はない」と結論づけた。検討会の桃井真里子座長（国際医療福祉大副学長）は「ワクチン自体の安全性に大きな問題があるということではない。調査し、より安心な情報を出したい」と話した。（森本末紀）